

北村朋幹さん(ピアノ)、山根一仁さん(ヴァイオリン) シュニトケ&ショスタコーヴィチ プロジェクトI 2017年10月1日(日)17:00開演 トッパンホール

<プログラム>

ショスタコーヴィチ: ヴァイオリン・ソナタ Op.134 (1968)

シュニトケ: ピアノ5重奏曲 (1972-76)

<休憩>

シュニトケ: ショスタコーヴィチ追悼の前奏曲 (1975)

ショスタコーヴィチ: 弦楽四重奏曲第15番変ホ短調Op.144 (1974)

<出演>

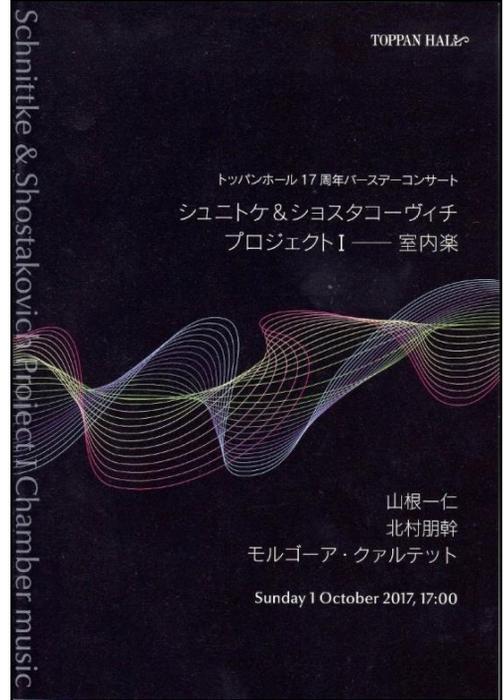
山根一仁: ヴァイオリン

北村朋幹: ピアノ

モルゴーア・クアルテット

この日の演奏会は、ショスタコーヴィチやシュニトケになじみのなかった筆者にとって、まさに「衝撃」だった。これまでの演奏会では、美しい音色や旋律に心が洗われることが多かったが、この日は墓地に蠕く無数の魂の怨念、どこからともなく飛んで来ては去っていく爆撃機、多くの兵士が軍靴を響かせ行進する広場。そんな情景が脳裏に浮かんだ。

ロシア革命後、自由な表現を制限された作曲家達は、それに対する苦悩や絶望を、体制に対する批判ととられないように表現せざるを得なかった。ロシア革命が起こったのが1917年10月。それからちょうど100年。それを記念してのトッパンホールさんの挑戦的な企画。



(当日のフライヤーより)

Q&A
この日の二人の演奏を聴いていると、作曲者は何を表現したくて、こんな暗く、重い曲を作ったんだろう。北村さん、山根さんは何を考えながら演奏しているんだろう、聴衆に何を伝えたくて弾いているんだろう等、いろんな疑問が湧いてくる。お二人に直接疑問を投げかけてみた。どんな答えが返ってくるのか。是非お読みください！

Q1. コンサートのパンフレットに、「1917年10月、ロシア革命が勃発。。。それからちょうど100年後の10月にショスタコーヴィチとシュニトケの室内楽を組み合わせた演奏会が開かれる。。。選ばれた3曲はどれも重くて深刻。革命100周年にソ連とは何だったのかを振り返るのに、これほど格好なコンサートは東京では他にありません。今回はどのような演奏を目指して臨まれましたか。



A1. 僕にとっては企画よりも作品そのものが圧倒的に興味深く、また作品を演奏するということも僕の行うべき全てでもあります。特に今回はホール側からプログラムおよびテーマの提案があったので、僕は本当に作品のみに集中していました。〇〇周年や、他の場所では行われないというのは確かに事実ですが、演奏する上では全く関係のないことです。

思いつく限りの方法を全て使って、可能な限り作品に近づいてみる、いつも通りです。



A1. まず、このような演奏会に携わることを本当に嬉しく思いました。ショスタコーヴィチとシュニトケという僕にとって特別な存在の二人の素晴らしい作品に触れることができるのはいつでも幸せなことです。

ショスタコーヴィチのソナタは楽譜を開いてからどんどん好きになっていった作品だったので、作曲者が何を楽譜に遺したのか、最大限音楽として引き出すことに全てを捧げました。もちろんこれは全ての演奏会に使えることですが。

Q2. 20世紀のソ連に生まれ、自由な表現が制約された時代に生きた作曲家ショスタコーヴィチ、シュニトケは何を表現したい、何を伝えたいと思って作曲したのでしょうか。



A2. 「自由な表現が制約されていた」というのは、このジャンルについて話す際にまるで記号のようによく使われる言葉ですが、その意味を真に理解できる人は現代にいるのでしょうか？ましてや芸術家が表現を規制されるというのは... 実際何人もの芸術家が処刑され、或いは自ら命を絶ちました。表現を捨てて生き延びた人もいますが、それもやはり芸術家としての命を絶ったという事でしょう。

今回演奏させていただいた2人の作曲家は、芸術家として最期まで生き貫いた人たちです。表現を捨てることが出来なかった(彼らほどの才能があれば、批判を免れるための作品を書くことなんて本当は朝飯前だったはずですから)、何かを表現しないでは生きていけない人生を歩んだ代償として彼らが抱えた苦しみを想うと、遺された1音1音があまりに尊く感じます。



A2. 今回演奏したショスタコーヴィチのヴァイオリンソナタではショスタコーヴィチの新しい一面、自分の知らなかった一面をたくさん見つけることができました。このソナタでは彼の内なる叫びや苦しみ、憎しみが感じ取れなかったのです。皮肉や憎悪、嘆きというよりも、それらによってもたらされた長く苦しい人生を送ってきた人物のたどり着いた未知なる世界... 僕には宇宙よりも深く遠い世界からの洗練された音楽のように思えました。

今回僕が演奏したシュニトケの作品はショスタコーヴィチの追悼の作品でしたが、祈りや愛、尊敬を心に留め、演奏しました。これについてはたくさん書けることはありません。これらの感情を演奏に投影するだけでした。

Q3. そのような作曲家による曲を演奏する際、聴き手に何を伝えたい、何を感じて欲しいと思って演奏していらっしゃったのですか。



A3. 基本的に演奏というのはとてもエゴイスティックな行為ですし、時に罪悪感を覚えることもあります。作品というのは他人の創作したものであり、我々は創作者ではないのです。それを自ら表現しなければならないという矛盾に悩むのは、演奏家の宿命です。

個人的には、まるでそこに演奏者などいないと感じるような演奏が理想ですし、それはどんな作品でも変わりません。そして、作曲家の想いに極限まで近づこうと努力すればするほど、実際には演奏はより演奏者の個人的なものになっていくものです。

作品を演奏したり鑑賞したりする時、その作品を結局は自分の人生に当てはめて、そこに想像力なども働かせつつ、何かを受け取るのだと思います。だからこそ素晴らしい作品からは、まるで誰かから知らなかった何かを教わるように、実人生を高めてくれるようなところがありますし、演奏というものはそれをする者の「人間」が、否が応でも表れてしまいます。演奏家は常に最高の「スピーカー」である努力をしなければいけないという事でしょうか。それは技術のみならず、どちらかという精神面の話です。

加えて言うならば、今回のような特別なプログラムは聴き手にも大きな謎を突きつけるようなものです。演奏家も聴衆も(僕は演奏会を大変多く聴きに行くので敢えてそう言いたいのですが)、作品に触れることによって、何か今まで考えもしなかったような事を考える、という事も時には重要ではないでしょうか。既知っている事ばかりを繰り返し体験することだけがクラシック音楽の鑑賞ではないはずです！



(ショスタコーヴィチ: ヴァイオリンソナタ 写真提供はトッパンホール様)



A3. いろんな感じ方があると思います。苦しみ、怒り、祈り、静けさ。正解はないと思います。ただ、僕が真摯にこれらの作品に接することによって、聴衆の方々も真正面から演奏を受け止め、多くの感情を得てほしいと思いました。

Q4. この二人の作曲家の曲を演奏する際の、難しい点、喜びを感じる点はどんなところですか。



A4. とにかく、自分の体験したことのない「痛み」を感じ続けなければならないので、健全な精神を保つのが難しく、またこんな恐ろしい作品ばかりを弾き続けてはいられません。今回も準備中、鞆の中には若きベートーヴェンの書いたとても希望に満ちた作品の楽譜が常に入っていました。そうやって何とかバランスを取っています。

喜びがあるとすれば...この辛い作業を同世代の山根さんと、時間を掛けて手探りで行えたことでしょうか。



A4. 難しい点は、演奏家である僕がソ連という国を体験し得ないことです。そのため、結局想像の世界になってしまう。ただ、たくさんの文献や資料に残っている歴史を知ることによって少しでも彼らの生きた時代の本質に迫らないといけないと思っています。

それらを自分の音楽として創り上げ、演奏会の最後の音を弾き終えた時、喜びを感じます。

Q5. ヴァイオリン・ソナタに関しては、何度位合わせをされましたか。意見が合わなかったりする場面はありましたか。そういう時はどう解決するのですか。



A5. 彼とは度々共演をさせてもらっていますが、特に今年はいくつかの大曲に取り組む予定があったため、6月にミュンヘンの彼の自宅で合宿をして、その時お互い疑問だらけでこの曲の初合わせをしました。その後各々宿題を持ち帰って、9月に入ってから何日間か集中的にリハーサルという感じです。

当然意見が合わない事もありますがそれは全く問題ではありませんし、むしろ自分1人では考え付かないような作品の可能性を見ることが出来ます。色々な事をメ切りぎりまで試して、お互いが妥協せずに音楽に近づける方法を探しています。



A5. ヴァイオリンソナタの初めてのリハは6月頃のドイツでした。当初は演奏することの難しさでいっぱいでしたが、練習を重ね音楽の核の部分に近づいていきました。

僕らは一回一回のリハーサルが長いので詳しくはわかりませんが、7日間ほどはリハをしていると思います。意見が合わないのはよくあることですが、お互いが最終的に目指しているものは大きな観点で見ると同じものなので、互いに納得するベストな道を選びながらリハを進めているつもりです。

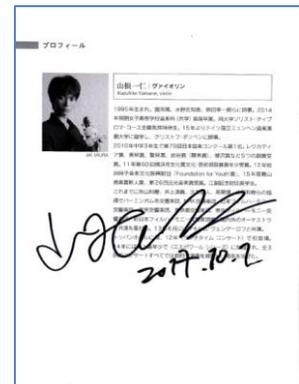
Q6. 北村さん、山根さん、お互いから学んだこと、刺激を受けることはありますか。



A6. 基本的に彼と僕は全く違う音楽家、人間です。それでも、お互い何かを目指して音楽を続けていたからこそ出会えた相手ですね。そして彼は、演奏を聴いた誰もが思うことですが、紛れもない天才です。リハーサルや本番を通してそれをとても強く感じ、羨ましく思うからこそ、自分は自分の道を同じくらい進んでいられたら良いというのは、常に思っています。



A6. 北村くんからは音楽に接するにあたって考えることの大切さを教えてもらいました。長く一緒に演奏してきているので、遠慮せずに最高の音楽のためのリハーサルをすることができる、とても貴重な仲間です。



Q7. またお二人と一緒に演奏するとしたら、どんな曲を演奏したいですか。どんな挑戦をしたいですか。



A7. お互いの心が同じ作品に向いた時、想像もしなかったような演奏を作ることができます。そういった経験が今までに何度かありました。その時作り上げた演奏が本当に最高のものであったかどうかは、今は未だ判断できませんが、そのプロセスは確かに特別なものでした。そういった「共作」がまたできたら嬉しいです、いつもそれを目指しています。



A7. 幸い、すでにくつも彼との演奏会は入っています。お互いドイツに住んでいるので、ブラームスやベートーヴェンには挑戦していきたいと思っています。そして、あまり知られていない、演奏機会も少ない...けれども素晴らしい。そんな曲も発掘して、どんどん取り組んでいくのも僕らの役目だと思っています。



(シュニトケ: ピアノ五重奏曲 写真提供はトッパンホール様)



(シュニトケ: ショスタコーヴィチ追悼の前奏曲
第2ヴァイオリンの姿がなくどこからか音だけが聞こえてくるという演出)

「聴き手にも大きな謎を突きつけたようなプログラム」という北村さん。「聴衆の方々も真正面から演奏を受け止め、多くの感情を得てほしい」と語る山根さん。確かに今回のプログラムは、聴き手にも様々な疑問符が湧き、謎を突き付けられ、いろんな感情が湧いた「衝撃的」なプログラムだった。そのお陰で聴衆の世界も広がったと思う。

「北村さんから音楽に接するに当たって考えることの大切さを学んだ」という山根さん。その山根さんを「天才」と呼ぶ北村さん。2人それぞれが音楽に真剣に取り組む。その2人が組むことによって、1人では思い付かなかった発想も得ることができる。演奏会に向けて個々が成長する上に、2人で組むことの相乗効果が加わる。大きな可能性を持つ若い2人が刺激し合い、引っ張り合い、どこまで進化を遂げていくのか、期待が膨らむ。



(演奏会終了後、ほっとした笑顔のお二人)



北村さんは「こういう機会がないとなかなか弾くことのない曲。こういう機会に1人でもショスタコーヴィチやシュニトケに興味を持ってもらえたら嬉しい。」と話していた。幸い来年3月25日(日)には「シュニトケ&ショスタコーヴィチプロジェクトII- チェンバー・オーケストラ」が予定されている。聴き逃さない。